

科目区分 芸術文化課程専門教育科目(選択必修)
科目名 音楽文化論 (前学期)
タイトル 担当初年度を終えて

音楽科 岸 啓子

1. 授業概要

芸術文化課程開設時に設置され音楽文化コース・造形芸術コース共通の選択必修科目である。授業の目的は音楽を文化的・社会的文脈の中で捉えることにより、社会や地域の中での音楽のあり方、音楽の役割、音楽の意味、音楽文化のあり方を理解することである。また、授業目的ではないが、遙かな先には音楽を通して社会と如何に関わるかという、自分自身の将来を考える促しとなることを望んでいる。

芸術文化課程造形芸術コースと音楽文化コースは、芸術や文化を共通のキーワードとしているものの、合同授業は少なく、課程全体の2回生が集まる点もこの授業の特色であろう。本科目は音楽と造形芸術という中味がまったく異なる2つのコースに適合する芸術文化論構築の困難さゆえ、これまで音楽化教員ではなく非常勤講師が担当してきた。今年度が授業者にとって1年目であり、音楽文化論と名称変更し、領域を限定しての授業としたが、その内容・方法・レベル設定・コミュニケーション等など多くの点を再検討して翌年に臨まなければならないと痛感している。

音文芸文とも専門は「実技・実践」であるという意識が強く、それ自体はプラス評価されるのだが、実践こそ真実という意識が、芸術諸学は無駄という考えに転化されたり、演奏実践にいかにも有効かという実用性からのみ計られる傾向があることは否めない。この授業では、音楽は個人の営為であると同時に、地域や時代に共有される文化であり、表現者の美意識と感情だけで完結する個人的存在ではなく、表現者と享受者のコミュニケーションであり、更には、社会的・文化的文脈の中に取り込まれつつ存在しているそのあり方について意識化してもらうことを目的とした。また、そのための内容として、最も親しまれおり、なおかつ20世紀をポピュラー音楽の世紀とする総括が一般化しつつある状況をふ

まえポピュラー音楽・ロックを選んだ。

2 授業改善のためのアンケート

アンケート項目は例年のとおり

- | | |
|----------|-------------|
| 1 意欲 | 2 出席状況 |
| 3 目的 | 4 内容的確さ |
| 5 なし | 6 説明のわかりやすさ |
| 7 発表等の機会 | 8 AV機器使用 |
| 9 レベル | 10 有益性 |
| 11 受講の意義 | 12 教室の雰囲気 |
| 13 シラバス | 14・15 自由記述 |

以上の内容でアンケートをとった。

3. 結果と考察

まず予想以上に悲惨な結果が出たのは、授業の目的、であった。音楽史や楽書講読などのように目的が明確な授業の場合、このような結果になりようもないのだが、目的設定の振幅が大きい音楽文化論では授業の目的をもっと明確にする必要があることを痛感した。目的と授業の内容は一体であるので、授業内容についての適切さについての判定にも、目的の伝わらなさが反映している。何を指すのかわからない授業で、ポップス・ロックを聴いた、という風に受け止めていた学生がいた、という状況にあったことは、喫緊の改善点である。

芸術を中心に学ぶ課程で音楽文化論を講義する場合、無難かつ歓迎されるのは、芸術音楽領域の文化論であることは確かである。しかし、現代の音楽文化、地域の音楽文化を眺める場合、それではすまなくなっている状況を、もっと判りやすく、丁寧に説明する必要があった。わかりやすさの要素とは、①主題の明確さ、②主題と内容との関連（この話を何のためにしているか）、③説明する内容の構造化、④言語表現の適切・的確・簡潔さ、⑤受講生の理解の把握、の5要素が主であろう。昨年度、説明の判りやすさについて問題を感じたので、音楽だけではなく、美術の学生も

全員受講が義務付けられているこの授業では、コース別なく理解できる授業内容を組み立てたつもりであった。しかし、今回は主題と内容（選択）についての、判りにくさであり、より問題が深く大きいので次年度からは、毎回の授業主題を説明し、目的との関連や意義についてもっと明示して理解を得たいと思う。

授業の意義については役73%の学生が極めてある・ある程度ある、と評価しており、音楽を上記観点から捉える授業の試みは、結果的には受け入れられたとも思われる。

今回授業中に疑問を感じたのは、クラシック音楽の優位性を絶対的に信じ、ロックやポップスなどを露骨に見下す態度をとる学生がいたことである。発表授業では、授業後発表者に見せることを伝えてコメントを学生に書かせたが、例えばロックについて発表したグループに「私はロックが嫌いです」とだけ記した学生（音楽）がいて、社会性やコミュニケーション力に問題を感じさせられた。自分の好みを言うだけで、相手の趣味や価値観を容認する態度がなく、求められた課題も果たしていない（発表へのコメント）点が残念かつ問題であった。これはまたコメントのあり方を授業の中で改めて確認する契機となった。自分自身の音楽への立脚点や主義は譲れぬものであり、独自の美意識は大切にしなければならないが、そのストイシズムが他の音楽ジャンルを音楽と認めない偏狭さや、クラシック音楽以外を見下す偏見に繋がるのは避けたい。とはいえ、大多数の音楽専攻生には専攻への情熱はあっても偏見とは無縁であることも彼らの名誉のために記しておきたい。

コメント

14 良かった点

- ・ 様々な曲に触れることが出来た。帰ってからまた聴いてみたいと思えるものもあり、楽しかった。
- ・ 聴く音楽のジャンルが広がった。
- ・ グレイの音楽の作られ方が見れたこと。
- ・ 知らない音楽にいろいろ触れて、新しい発見があった。
- ・ 自分の好きな音楽を発表させてもらえた。
- ・ ロックという素材が気に入った。
- ・ 親しみやすい曲が多くて助かった。
- ・ 音楽専攻以外にもわかりやすかった。
- ・ 他の音楽ジャンルにも興味が持てた。

16 改善点

- ・ 授業の開始・終了時間がばらばら。
- ・ ロックは好きでないので、聴かされてつらかった。
- ・ 音量が大きいときがあった。
- ・ 後ろの人の私語が気になった。

音楽文化論 38名

課程	芸術文化	2年
		38名

	5	4	3	2	1
1意欲	5	17	15	1	0
2出席	14	15	9	0	0
3目的	3	17	14	2	1
4内容	7	16	11	2	2
6説明	6	17	14	1	0
7発表	12	20	5	1	0
8AV	22	14	2	0	0
9レベル	8	16	12	0	2
10成果	10	20	6	0	0
11意義	12	16	8	2	0
12環境	3	16	12	6	1

13		ある	ない
シラバス		26	12



